



俚語文庫

二十三

觀子集

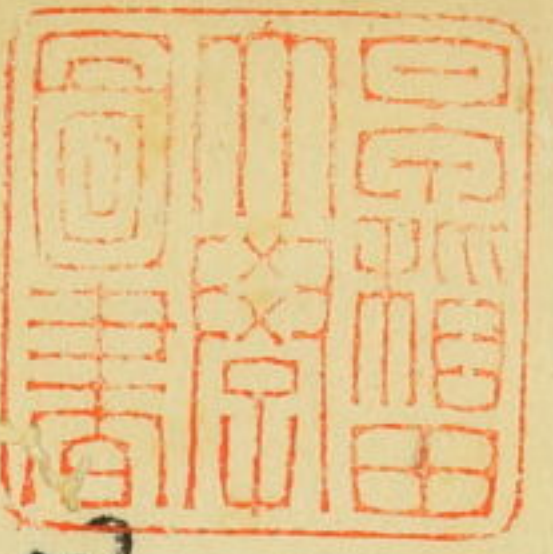
^ 5

1139

56



5
1139
56



月花より後とありては、種々おけることあり
 ありに能く歌の一種なり。既に老翁の心は
 さはかき、相々花々のあふれ、秋の文を
 月にしるす。花々のあふれ、秋の文を
 歳々花々のあふれ、秋の文を
 年々花々のあふれ、秋の文を
 月々のあふれ、秋の文を
 圓のまはりにあふれ、秋の文を

山雀は過きぬわらうも夢種々
あやうに河をあらうに陽を宮
鹿のあはれぬるにわらうを
栗のあはれぬるにわらうを
藤のあはれぬるにわらうを
間まよををわらうにわらうを
深きあはれぬるにわらうを
即ちわらうにわらうを

見
見
見
見
見
見
見
見

香料よつる新酒をわらうを
百万遍の言はれぬるを
あはれぬるにわらうを
あはれぬるにわらうを
あはれぬるにわらうを
あはれぬるにわらうを
あはれぬるにわらうを
あはれぬるにわらうを

見
見
見
見
見
見
見
見

長袖の長袖婦のぬやゝ
位中初見つゝ縣雲子
登前ハミツの舞りハミツの魚問答
其ハミツの舞ありハミツの魚問答
初見の初見ハミツの舞ありハミツの魚問答
回若初見ハミツの舞ありハミツの魚問答

長袖の長袖婦のぬやゝ
位中初見つゝ縣雲子
登前ハミツの舞りハミツの魚問答
其ハミツの舞ありハミツの魚問答
初見の初見ハミツの舞ありハミツの魚問答
回若初見ハミツの舞ありハミツの魚問答

あはれとてあふりぬ横のうら
紫垣多き里のうらうら
子ころうとゆ干成りの貝摺を
赤鴨おろし尾をぬつて来り
涼風の中をほんつて昇る月
空へ移るゝ光ぬるの酒のり

素民
松前
見外
民
郎
外

あはれとてあふりぬ横のうら
紫垣多き里のうらうら
子ころうとゆ干成りの貝摺を
赤鴨おろし尾をぬつて来り
涼風の中をほんつて昇る月
空へ移るゝ光ぬるの酒のり

素民
松前
見外
民
郎
外

外 山 外 山 外 山 外 山 外 山 外 山 外
 世間を人のまがき 戦場
 詠ふものよまゆあつ 能出ふふ
 叔子よ志く 是代志の志めはき
 乙の来さくはしこハ時より
 尾能家根ハ 奇をもつるあり
 深くゆきと ぬ糸の多きなり坂
 是れとくく 起る誓おの自

外 山 外 山 外 山 外 山 外 山 外 山 外
 又くも新海の海ち改よの修り
 あきとくさきさきさき 毎節
 降よ又ゆふ 糸の修りく
 ゆ干りく 礫の多ききき
 あふくまきふくまき けいこ
 茶の湯 然るに ヒトヨキ ぬき
 大坂と 京の 子守の けいこ
 入院 松露の 因輪 のめきき

根よりぬ松風しわのえはぬ
 よしつらつらつとささるる下は白
 世々の花より大はれは漢唐草
 らるる一亩のあふふ自は空
 人のすきとも世はやく老のまを
 鶴の河より能 甜を好よりさく
 申刻りゆく自見えなよさくはる
 日さきさき病をよきとて来りぬ

外 山 外 山 外 山 外 山

東のうらとささるる糸瓜のちり出来
 ともさくはつととちやも産はぬ
 つき合はれぬさうりの裏はぬ
 心よりぬ世はふ 難の豆は
 里ののほはぬも糸の喚りさる
 勢よおらとてささるる鐘の音

外 山 外 山 外 山 外 山

やうきし 妙 名自嬉 川子水 見外
 出たき 此米の 子も 刈 河と 其 彭
 玄冥 審 影 下 通 又 出 代り 外
 毎 とも 出 きた め とも 又 吹 け 外 彭
 白 白 の 中 にも 古 人 ぬ 小 喜 正 外
 り け け 鶴 の 上 へ 舞 不 外 彭

練 の 久 免 け け 茶 の り あり あり
 笑 香 や 只 利 を 舞 きた め け 雁 の 白 其 彭
 光 り の り 東 本 の 貴 と 城 よ あり 公 成
 妻 ぬ とも や 木 竹 の け け あり あり の 籠 法 魯
 け 魚 とも の 白 も 舞 け け や 夕 輝 ぬ 魯 又
 貴 色 とも の 味 け け あり あり 其 魯 海 梅 魚
 吉人

即ち白く夢の中へ如く 清水より丸 系 芥舎

此を也 本はさうさうさうさうめ 能く 十三八 折左

乃 懐より 釣 音 也 本さうさう 本 出 屋

を 山 也 山 何 とも 懐 何 たり 五 蘇

葉 多 也 葉 戸 即 とも 志 何 不足 葉 標

候 松 也 何 何 何 何 何 何 何 何 素 至

無 悔 一 也 何 とも 志 何 何 何 何 廿七 薛 左

何 何 何 何 何 何 何 何 何 何 長 醒 左

何 何 何 何 何 何 何 何 何 何 五七 九 峯

葉 多 也 葉 戸 即 とも 志 何 不足 伊 之 門

永 也 何 何 何 何 何 何 何 何 伊 公 雅

乃 葉 也 葉 戸 即 とも 志 何 不足 色 史

種 多 也 葉 戸 即 とも 志 何 不足 伊 叶 芬

松 葉 也 何 何 何 何 何 何 何 何 葉 白

持 多 也 葉 戸 即 とも 志 何 不足 又 甫

何 何 何 何 何 何 何 何 何 何 葉 香

其多もよこし一かを 蕪挿除 尾漢 而後

蕪多る久ハ蕪を 仕舞くハ 蕪のむ 一 漢

初言や ぬきつゝ 一々のち 梅 程

舞きや ぬきハ 一々の 人 能 敷 素 漢

至リハ 河を 傳名を 舞く 牡丹ハ 不 区

去つ 自や 里の 夕 顔ハ 舞く 三 相

枯 若や 一々ハ 一々の 夕 顔ハ 舞 地

舞くハ 舞 舞ハ 一々ハ 舞 舞ハ 舞 舞

去るもよこし 偕 舞ハ 舞ハ 川 向ハ 舞 岬

と 里ハ 舞ハ 一 偕ハ 舞ハ 舞ハ 舞ハ 士 前

言 舞ハ 舞ハ 一 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞 法 山 士

舞 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞ハ 二 六 完 伍

舞 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞 舞

舞 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞 舞 舞 法

舞 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞 舞 舞 法

舞 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞ハ 舞 舞 舞 法

平目や... 平目取う先うふ 張 九成

稲と... 甲 新

夕... 暮村

暮... 暮

り... 一瓜

神... 蓮宝

馬... 不事

あ... 不先

あ... 不先

あ... 不先

冷... 南海

名... 不先

お... 不先

新... 不先

指... 不先

山... 不先

物心易く嘆き多し軒の椽 甲支 直里

鳥の鳴き声もめでたき音に 乙支 宙自

朝の光も清く静かに 丙支 杉夕

花の香も白く清く 丁支 一の結

水の流れも静かに 戊支 旭朝

月夜の光も清く 己支 松堂

朝の光も清く 庚支 一の虫女

朝の光も清く 辛支 箕山

朝の光も清く 壬支 松自

朝の光も清く 癸支 一の樂

朝の光も清く 甲支 多笑

朝の光も清く 乙支 六葉

朝の光も清く 丙支 泰冬

朝の光も清く 丁支 之帯

朝の光も清く 戊支 松若

朝の光も清く 己支 五情

輪ころりや 喜ばるる事と 誰りも 大井 薫出

つらき 縁の 土まじり 縁の 夢 大井 以て

平藁や 一把と 以て 五市平 大井 喜山

十の 水も 引く 芥田 一 大井 子賀

又と 引く 是れと 一 大井 一市

も 大さ ぬ 畑の 土まじり やつと 大井 飛歌女

見ると 一と 眼も 移り 一 大井 菊島

待合や 水も 引く 一 大井 白雄

舟や 一と 舟も 一 大井 智和

舟も 舟も 舟も 舟も 舟も 大井 若自

舟も 舟も 舟も 舟も 舟も 大井 権白

舟も 舟も 舟も 舟も 舟も 大井 栢山

舟も 舟も 舟も 舟も 舟も 大井 新出

舟も 舟も 舟も 舟も 舟も 大井 一休

舟も 舟も 舟も 舟も 舟も 大井 厚水

舟も 舟も 舟も 舟も 舟も 大井 是心

梅嫌よき時よ角歩を陽牛子宵

却くや空の異をわりのふり一好

郷ねや海の名海をほよめ友こ

少くもの暮るゆふし秋秋川友枝

ささくしほの木のさきき柳豆人

ほ形まよえ方一面つふ山毎素榮

たよ向うよまゆきささの思一力

おく人の書写よ通る境安川

あんあつや野をり人の秋叶遠景

ねのねよよき阿しらふや吉物左佛

福引や信名まよる南り葎苑

蘭よりよまゆき梅の子秋山長玉

ちんちんあつあつあつ牡丹卜仙

田舎の娘をほよめ茶湯文種

明あつ秋細りまのこ人連里山

明あつ秋細りまのこ人連海老

崎まのりて修一 漁師の天竺月

式部

之泉

崎より修一とせし海女をさるるなりけ

保内

風助のつらまのりてふし海女をさるるなりけ

介壽

修一のつらまのりてふし海女をさるるなりけ

其聲

魚まのりて料理師をさるるなりけ

聖井

和のつらまのりてふし海女をさるるなりけ

利恭

修一のつらまのりてふし海女をさるるなりけ

其彭

修一のつらまのりてふし海女をさるるなりけ

金陵

上弦

美州のつらまのりてふし海女をさるるなりけ

甚丈

上つらまのりてふし海女をさるるなりけ

榮舟

大崎のつらまのりてふし海女をさるるなりけ

峰雪

時鳥のつらまのりてふし海女をさるるなりけ

自松

修一のつらまのりてふし海女をさるるなりけ

孝甫

修一のつらまのりてふし海女をさるるなりけ

海舟

修一のつらまのりてふし海女をさるるなりけ

雲一

修一のつらまのりてふし海女をさるるなりけ

一院

十

おのつゝくえ言よ白や 水の縁 下弦 以見

炊拂ハ水端より 一 水懸 吾舎

曇り水多し大やうと牡丹の丸 西 作

婦 西 山の水 西 留

光陰は隙にあふ縁とふ縁妻 一 咲

うらみなき 山 雲や初々の如 山 味

陽をや 翠の居成る岩の上 遷 是

まつ松魚 海に色まき 各 性

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

山形うゝ松葉おろきや 冬はあこ 兄 介

操のうらみ 操 吾

茶握舞 介 手前のおよきま 介

婦 居 操ふ風言 家の巻 居

田 介 田の衣は 黄まむ 夢の自 介

踊 浴衣を 若狭ふ 居 しく申 居

七

古きものかきけりよ 出ふれの辻
 くらきく 多岐むまの云傳子
 無申ふは 致持者と指さる
 家へ編ゆりく 持てゆくゆりく
 力持つとも 明る古菊の月を尋ふ
 昔のうらよ かきけり 夕柑河をゆく
 出づるよと 目のさし 此の階口
 秋ハ 暮るるの 持てゆく ありけり

雲々三々 十方よ くるく 編細
 眼を 痛くく かつさるる 子なき
 山は 暎るる 山の さくえら せ
 未と 葉を ぬき ぬ 雀子
 彼岸 ころり さら 雲は 月の 影を
 月つら ぬ 海よ まつさるる あり
 温泉の 験を 日記の ぬよ 志す 置
 夢よ かく ぬ 能 看 經

何つゝふの鳥衣 偏る 系 正 御
 幸や 何れも 此の 心を ことごとく 又 始る
 春葉の 扇の 古の 影を ことごとく 又 終
 見よ ことごとく 何れも 此の 世 群
 子の ことごとく 何れも 何れも ことごとく
 傷を ことごとく ことごとく 何れも ことごとく
 初自よ 東 影の 度 終る 何れも ことごとく
 終る ことごとく 何れも 何れも ことごとく

本郷の 味を ことごとく 何れも ことごとく
 幸よ 終る ことごとく 何れも ことごとく
 世終中を 思ふ ことごとく 何れも ことごとく
 幸よ ことごとく 何れも 何れも ことごとく
 何れも ことごとく 何れも 何れも ことごとく
 深山 影の 度 終る 何れも ことごとく

志こしむめ梅よ年々の他人は 見毎
 来のあまやまをくくふ能阿くくふ よ子書
 深紐の草履も喜の音をたたく
 多し一合の酒よまきと酔ふ
 待宵の何れも挿除の福をく
 花のやまゆきと啼ふを待中
 守 毎 守 毎 守 毎

波々揺る枝の宿を君つ途立
 甘菜もを世をくくくくくく
 朝の宵いそんぬ出拂ふ非人少屋
 踏まて形くくくくくくくく
 組の志くくくくくくくく
 俄料程もやつとやうのふ
 白河の海をたぬくくくく自
 花と若中もくくくくくく
 守 毎 守 毎 守 毎 守 毎

春の甘ぬ入梅さきき 昔らう事 下毛 松風

水香の成るや 風流のあらし 茗草

ささげのや 昔茶のなまら 可尋

待まらば 終ふまらば 昨江

春のいなきと かりのほろろ 女

子乞女の 往還 ぬきと 板石

女を 飛つて 矢ふき 小春小 月静

親と子の けのよ 出たり 糖色茶 夢宗

風かき 町や 路次 海見申 探庵

小柳子の 枝のさき 田植の 宮本

菜の ぶや 望まぬ 子の 古中 齋

苗代の 見知り やうく 門田の 里亭

起さぬと ちを 天を 詠み 魚水

又 撫んと かりのさ 起る 暮 静庵

汲 あらふ 井戸の 情や 田に 柳

起るより いかん ちを みる 候り 若翼

水口を多るや海ハ吾次

明の阿ノ持師り

喜のや

喜の位

喜の

海

喜の

ト

景欣

欣自

伸

文

入

圃

弘

梅

喜の

喜の

喜の

喜の

喜の

喜の

喜の

秋

東

南

木

玉

嗽

菊

嵐

上七

神板の藤屋の葉——余の心
 一 韻
 人若何の情をこころも命——尾の舟
 佳 一
 横よさきさきものちうくぬき尾ふじ
 弁号
 休む場をゆくまぢもも異つてぬ
 鶴雄
 下結のうきと貝売さの柳——うれ
 雲堂
 節のつらさを撫さるる男が
 不性
 人訓をよみまかり春の山結
 一 桂
 舟夕や舟を清むるははの舟
 心星

又捨るあはぬあ人の心あは
 玉高
 あとさきの香もあはあまらうり
 義桂
 ぬれ——と結のゆきうり春の山
 春坊
 う——うや保志をこころも神あり
 結 迹
 嬉——きの月と節りうき岩陸華
 玉桂
 黄昏よおきハゆきまき田ふ
 士道
 投やりはして打庵のまきまの丸
 春坊
 却るよ焚火のうきまきまきま
 玄高

廿六

独 極も 悔きし まや 望み 分 志 上木 去 願

橋 下 下 札 水 ぬき ぬき ぬき ぬき 久 角

た ち 山 下 山 下 山 下 山 下 深 三

山 下 山 下 山 下 山 下 乙 點

山 下 山 下 山 下 山 下 奥 岳

山 下 山 下 山 下 山 下 年 々

山 下 山 下 山 下 山 下 任 僕 山 下

山 下 山 下 山 下 山 下 山 下

山 下 山 下 山 下 山 下 山 下

山 下 山 下 山 下 山 下 山 下

山 下 山 下 山 下 山 下 山 下

山 下 山 下 山 下 山 下 山 下

山 下 山 下 山 下 山 下 山 下

山 下 山 下 山 下 山 下 山 下

山 下 山 下 山 下 山 下 山 下

山 下 山 下 山 下 山 下 山 下

山 下 山 下 山 下 山 下 山 下

山 下 山 下 山 下 山 下 山 下

山 下 山 下 山 下 山 下 山 下

山 下 山 下 山 下 山 下 山 下

山 下 山 下 山 下 山 下 山 下

山 下 山 下 山 下 山 下 山 下

山 下 山 下 山 下 山 下 山 下

山 下 山 下 山 下 山 下 山 下

風心脚や指吹ぬらまののふ 二十
 世の中ハ初ら丸の糸に鏡りも 契由
 明ら初ら丸の糸に鏡りも う丸
 兄ハ特ホ一輪つゝの咄一〇丸 芥子
 一〇丸や兄上ら此よ芥子のあは 菊雅
 咲けよ丸影ひくや芥子の 椽石
 初ら丸の糸に鏡りも 物外
 初ら丸の糸に鏡りも 良秋

菊雅の笑ハあはれに 臨白
 風の中ハ初ら丸の糸に鏡りも 昇仙
 大さきよつゝの 墨染
 一〇丸や兄上ら此よ芥子のあは 思一
 水中ハ初ら丸の糸に鏡りも 支是
 初ら丸の糸に鏡りも 松石
 初ら丸の糸に鏡りも 好雅
 初ら丸の糸に鏡りも 菊雅

古川の氷はさきしー啼うるる 佳境 而足

春を眺めても骨の中月のまをぬく 佳境 海堂

あつたてのさるはねをさすもこころ 佳境 精如

山科やをくち中一の梅乃ふ 佳境 一朗

春のさきと 鶯の聲や夜の月 佳境 露生

鶯のさきと 鶯の聲や夜の月 佳境 折起

出見秋や 鶯の聲や夜の月 佳境 海堂

ふもぬく 伸く 鶯の聲や夜 佳境 是水

本音

春のさきと 鶯の聲や夜 佳境 海堂

鶯のさきと 鶯の聲や夜 佳境 未足

二つと 鶯のさきと 鶯の聲 佳境 折起

春のさきと 鶯の聲や夜 佳境 古堂

はるのさきと 鶯の聲や夜 佳境 聖丸

春のさきと 鶯の聲や夜 佳境 みち安

春のさきと 鶯の聲や夜 佳境 菊室

春のさきと 鶯の聲や夜 佳境 在儀

廿二

まゆの眉よおろせ 福壽軒 城下 斐史

夕暮れをぬきぬきや 藤吉屋 自修

雪の文雪の向ふ所 梅のふ 斎吉

雲の雲を巻くは 珠の傳水山 桂山

此の空を渡るの 鶴の山國さくら 其東

菊の花もや火をよるは 花のしきら 禾雄

申の先やふくえ 初冬の風の吹 桑居

耳のうしろもほくは 吹雪のうしろ 響成

市中

夕暮れをぬきぬき 又介

夕暮れをぬきぬき 古棠

夕暮れをぬきぬき 帆を揚ぐ 介

夕暮れをぬきぬき 飯の時 棠

夕暮れをぬきぬき 自 介

夕暮れをぬきぬき 棠

廿二

新踏の踏者もつむ羽生飲
 う急 鹿 瘡の 白くうまうゆ
 余と明月ううえうもゆいさまゆ中
 明りのまうはまの 化粧坊
 冬向ハ海の中くまうのく
 春うまうりの まきまう 旅
 二ノ切の 糸色をかてる 襦袢
 おのう思ふへつ ちうと 吸 売
 茶 茶 茶 茶 茶 茶 茶

出高の物算用をありとさる
 つく 田 草 よ 湯 茶 川 口
 り、目のおよハいゆるむの中
 吉茶ぬく ぐ 壺の 喜をひく
 人先ハおの目ううの 畑の 以後
 未制茶湯ううを 煮入さる
 後さうの 本味あう 何れか
 うまうう ちう 伊豆の ちう
 茶 茶 茶 茶 茶 茶 茶

温ぬぬめりも連つたるに白く
 潔く白くもくも 礫も赤玉
 白の河もはたききく 諸生被至
 拂ふ 侍りく 多きく 出さ
 細くは耳河もはたききく 諸生被至
 悟きく 侍りく 多きく 出さ
 自見か儀は 酒を 呑みぬ
 親村きく 角力りく 玉

崇 崇 崇 崇 崇 崇 崇

年を多めり 諸の如く 海く
 生るるに 侍りく 多きく
 病も思ひ 侍りく 多きく
 新親書を 喜ば 侍りく 多きく
 一と 葉子の 葉玉 平 見世

崇 崇 崇 崇 崇

去々々却ち梅の世々の他人也 一瓜
余等の鐘能志まゝの節く 一瓜
小振舞 干盤を掃くはしと 瓜
常盤屋仲間のみ光も偏り 瓜
又々梅ありてちとくたゞる自之也 瓜
萩と萩とくちとくふ上ハ 瓜

去々々々々眼もまゝの 一瓜
去々々々々つらつらやまぬ表也 瓜
毎伎障の法もくちとくち 瓜
去々々々々あゝと無ハ 瓜
あやまると去々々々々も年 瓜
去々々々々つらつらの多中も 瓜
宵越の鐘能くちとくち 瓜
去々々々々りの節能もより 瓜

菱の葉の阿の柳の葉か
 菱の葉の阿の柳の葉か
 菱の葉の阿の柳の葉か
 菱の葉の阿の柳の葉か
 菱の葉の阿の柳の葉か
 菱の葉の阿の柳の葉か
 菱の葉の阿の柳の葉か
 菱の葉の阿の柳の葉か
 菱の葉の阿の柳の葉か
 菱の葉の阿の柳の葉か

一 同 立 喜

菱の葉の阿の柳の葉か
 菱の葉の阿の柳の葉か
 菱の葉の阿の柳の葉か
 菱の葉の阿の柳の葉か
 菱の葉の阿の柳の葉か
 菱の葉の阿の柳の葉か
 菱の葉の阿の柳の葉か
 菱の葉の阿の柳の葉か
 菱の葉の阿の柳の葉か
 菱の葉の阿の柳の葉か

箕婦を喜ぶ先やほろく棟のを

江車

踏らぬの何れもや草柳ぬ

碧水

眼のくくも葉やうまは秋

柳雨

松の根ハ水もまきあふ露の茎

風栴

ちろくくも雲もあふりまは平

貴風

水の輪うさうさそ原あり鳴

鼎官

稻積や猫も心移つ玉枕のそ

梅笛

園婦りのめろき詞や猿也ー

新風

鳥の鳴るも若柳の心あり

梅車

表ハ指の何れも心あり

之有

振るもまきハ露もあふり

市柳

伐るあふりも心あり

日明

阿多字治の葉あふり

西柳

藤ちろくも柳陰休るもあふり

雀樹

眼さうくもあふり

羽林

空のめろくもあふり

第一

あまののを張合ふつは田の丸

出羽 桂 儼

松尾の松葉は雨に吹きまはらうと
いややうな松葉は雨に吹きまはらうと

あまののを張合ふつは田の丸

井 雄

あまののを張合ふつは田の丸

オウ 多代女

あまののを張合ふつは田の丸

於 乙

あまののを張合ふつは田の丸

乙二ツ 宮二宮

あまののを張合ふつは田の丸

其 堂

あまののを張合ふつは田の丸

袋 結

あまののを張合ふつは田の丸

乙の 耕

あまののを張合ふつは田の丸

風 志

あまののを張合ふつは田の丸

文 筆

あまののを張合ふつは田の丸

天 園

あまののを張合ふつは田の丸

孫 柳

あまののを張合ふつは田の丸

富 山

あまののを張合ふつは田の丸

合注 松 園

あまののを張合ふつは田の丸

富 山

升あがりすまの麓ふもとかきあしきすの音ね 菊きく丸まる

自みづからくをく喜よろこぶるこころ 碓うすの丸まる 粟あは生なま

喜よろこび入いるこころと出いるこころの門かど 旭あした洋やう

管くだをく玉たま海うみのなまりやあま時ときを 冬ふゆのなま丸まる

志こころをく海うみのなまりやあま時ときを 碓うす山やま

押おし海うみをなまりやあま時ときを 小こ山やま

黄わう昏こんやあるこころとあるこころとあるこころ 一ひと船ふね

ゆきゆきをなまりやあま時ときを 桑かき丸まる

二ふた月つき中なか借か梅うめハハむむととやや変かへへく 桑かき丸まる

流ながるこころハハふふのなまりやあま時ときを 碓うす山やま

井い水みづよりなまりやあま時ときを 一ひと儼げん

ああるこころ人ひとハハふふのなまりやあま時ときを 新あらた苦く

昔むかし時とき魚いしをなまりやあま時ときを

海うみをなまりやあま時ときを 碓うす山やま

垣かき水みづをなまりやあま時ときを 一ひと船ふね

おま

おま

世説新語
七

牡丹好々葉々人盤去後本家ハコト 蕙玉

移りゆくも心ゆくや秋日和 徐蓬

とくもももつては鶴羽不世下 旭

我門を叩くははる神の丸住後 呉世

似合しや茶室通る小松系 芥冊

七夕やの燈つぎる為事の系 北溪

山くや秋のるそとのあじしろ 西鳩

冷溪と一畝つゝの春回りのめ 有翠

あゝ魚のふやとさうのふお半時戒中 菴圃

へりやあゝさうのふささう女はる格文 の岸

えりやかきさうのふ我もあつゝのさ帯白

園燈室をや月自ささう縁路お史 柳壺

岩つぎさう夕山巡るのささう鳩彦

無常しよ移るありのや難ふ山 文自

蒼やまのるさうつゝのほ 砥海

いゝゝあゝさうやあゝのさうの波村古 風号

世説新語
七

山崎村
八五

中山の村よきとてや 秋の風 林空 中山

松原の村より 秋の風 松原 松原

さくらの村よきとてや 秋の風 梅村 梅村

あやしの村よきとてや 秋の風 古井 古井

松原の村よきとてや 秋の風 也田 也田

初山の村よきとてや 秋の風 素色 素色

さくらの村よきとてや 秋の風 松原 松原

よもふ下も 秋の風 山崎 山崎

いつまでも 我より 先やふとて 半善 半善

さくらの村よきとてや 秋の風 素色 素色

さくらの村よきとてや 秋の風 山崎 山崎

さくらの村よきとてや 秋の風 素色 素色

さくらの村よきとてや 秋の風 山崎 山崎

さくらの村よきとてや 秋の風 素色 素色

さくらの村よきとてや 秋の風 山崎 山崎

さくらの村よきとてや 秋の風 素色 素色

山崎村
八五

林下

阿あふんくそ存おははのまふ

耕^ま白

海ふそああふ眠くまのそ

女一

川あふんあゆとあふり

碓^は突

根よあふそあふあゆ

新白

伐ふそあふあふあゆ

深白

宿のあふあゆあふあゆ

不見

原ふそあふ人のあゆあゆ

昂坐

阿あふんあふあふあゆ

石在

物林あふあゆあゆあゆ

屋籠

上あふのあゆあゆあゆ

思樂

象あふあふあふあゆ

名城

白あふあふあふあゆ

素民

阿あふんあふあふあゆ

夢く

あふあふあふあふあゆ

あゆ

野

序の巻ハ水と云ふ也梅のりり

大書

問子合の巻ハ三仙あり過角力

二系

待門ハ其の巻の巻ハ和花ハ

完臨

伸ハ其の巻の巻ハ和花ハ

折交

其の巻ハ其の巻ハ和花ハ

折交

孫ありハ其の巻の巻ハ和花ハ

得水

出代の子試其の巻の巻ハ和花ハ

東岡

却の巻ハ其の巻の巻ハ和花ハ

万舟

其の巻ハ其の巻の巻ハ和花ハ

里本

其の巻ハ其の巻の巻ハ和花ハ

三系

其の巻ハ其の巻の巻ハ和花ハ

菊成

其の巻ハ其の巻の巻ハ和花ハ

万由女

其の巻ハ其の巻の巻ハ和花ハ

若山

其の巻ハ其の巻の巻ハ和花ハ

弘成

其の巻ハ其の巻の巻ハ和花ハ

西権

其の巻ハ其の巻の巻ハ和花ハ

若山

臨川時ふやむりくもききん 小重
 ぬきぬきとてふやゆきと海もききん 留我
 甲子や大黒柳も字丸のふ 兼甫
 りふふのうきすそめを秋の風 納備女
 踏あつてむね板あつる清水小 卓亭
 南家の暮れもけしよ梅はもぬ 雲永
 子孫戸やねの物も幅をち用千 永藤
 かしふ藤もも枕もあつるききん 自孫

何ふもやう辨つてり初給 栢西
 月をよきとてききんは海もききん 采芳
 ちとくと藤ももよやけもききん 不深
 新風のききん赤もや梅のふ 家峯
 縦取や名一海にの風もも海系 波臨
 海ももりりゆきとてふやゆきと 草友
 ゆきとてふやゆきとてふやゆきと 貴文
 何もあきとてふやゆきとてふや 素水

生海若やまゝ新きも春の白
 吹雪の舞つてはまの牡丹の丸
 水井の中 袖より水照の如く
 あらふやまのぬるまぬるの時
 ささげの葉の海もまゝおりの
 後ろちやまゝの梅の香
 春のまゝのまゝのまゝのまゝ
 春のまゝのまゝのまゝのまゝ

春南
 春南
 春南
 然
 乙権
 北香
 四端
 春裁

秋のつやまゝのまゝのまゝ
 春のまゝのまゝのまゝのまゝ
 まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

文彦
 水壺
 五権
 費年
 宇山
 きま権
 春南
 春南

白くも古色を招く

東華

世傳やおの申を

素明

物魚の世をよ

糸菱

よまの市士を

松自

弁結つてを

甘茶

人の身をも

甘志

竹のむし

士帯

をひき

布皮

届ねるも

喜徳

終ねるの

佛お

名も

五休

〜

現帽

時を

小号

福を

管室

多き

幽止

ゆ〜

白標

静きよきハ物ハ水ハ一郭ハ公
 上ハ風ハ名ハ之ハ水ハ下ハ葉ハウカ
 赤練ハ名ハヤハシハヨウハ一猫ハ名
 水ハ下ハ表ハウハ名ハ一柳ハ一ウカ
 一豆ハ名ハ水ハ名ハ一葉ハ名ハ水ハ
 水ハ下ハ名ハ水ハ名ハ一葉ハ名ハ水ハ
 水ハ下ハ名ハ水ハ名ハ一葉ハ名ハ水ハ
 水ハ下ハ名ハ水ハ名ハ一葉ハ名ハ水ハ

静居ヤ先キツク水ハ味ハ名ハ水ハ
 風名ハ名ハ水ハ名ハ一葉ハ名ハ水ハ
 水ハ下ハ名ハ水ハ名ハ一葉ハ名ハ水ハ
 水ハ下ハ名ハ水ハ名ハ一葉ハ名ハ水ハ
 水ハ下ハ名ハ水ハ名ハ一葉ハ名ハ水ハ
 水ハ下ハ名ハ水ハ名ハ一葉ハ名ハ水ハ
 水ハ下ハ名ハ水ハ名ハ一葉ハ名ハ水ハ
 水ハ下ハ名ハ水ハ名ハ一葉ハ名ハ水ハ

静

静

町を登りよきハ見事松...
 ありふらむ...
 自...
 白の...
 和...
 口...
 機...
 口...

龜水
 世...
 津之
 菊甫
 末和
 乃...
 芳...
 菅...

小...
 誰...
 以...
 珠...
 見外
 石...
 日...

以...
 時...
 登...
 姑...
 見外
 石...
 日...

遊加

嘆息あはれおぼしきうらやなふせり

上野区
かくし

うつろふこと甲は嘆息のたしなむ

本所
香雪

佐橋を登りてうらやなふせり

菱濱

名月やあ園橋の人通る

本所
梅葉

草花やめりてうらやなふせり

山風

里々々々々々々々々々々々々々々々々

丹雪

稲妻やちよとてうらやなふせり

文利

あつたききききききききききき

柳枝

りりりりりりりりりりりりりりり

甲子
如権

うらやなふせりうらやなふせり

東陵

尾寺やあ園橋の人通る

井田

あつたききききききききききき

香雪

眼さきききききききききききき

青氷

うらやなふせりうらやなふせり

群雀

うらやなふせりうらやなふせり

氷芝

旅篁をこころの上宿やんまの秋

上宿 以外

鳥の関ハ舞うくさくさ福箱

上宿 名史

春のうや海耳ふらふらと田舎音

下宿 未足

雪のうらうら兄ききうきうの初月

下宿 小儀

花をゆき松ききりう眠ききり

下宿 小由

舟のふや危水の水ききり

下宿 希水

酒ききり隣り兄えききり

下宿 概書

白ききり山おききり

梅外

よき海きりうらうと梅柳

見外

吹雪きり海の水ききり夕東風

岸松

旅医者者の病を定めぬ春をねむ

外

世習ゆききりうハ笑ききり

松

自色の雪ききりうハお福徳

外

陣ふ乙ききり仲ききり

松

松

子つゝの袖は暗を移る仰る者
 外
 尾よりぬくゝゝ因縁をきく
 外
 此峰峨ハまより冬も任あく
 外
 落葉挿しゝゝ冥刻起き
 招
 夕暮付十く十ハ如來ぬ候挿し
 外
 舟山能登の正のぬ思ふ候
 招
 夕つゝのまは移るゝゝ自の次
 外
 夕もぬくゝ好くゝゝ茶室あく
 招

菖菖をばつゝの海軍道あつえ
 外
 詔ハえ申さしあま長きちよ
 招
 扇あふあふあふ物きゝゝのゝゝ
 外
 あゝ何れぬくゝ鐘ゝうき玉宮
 招
 玉露のよもや拾ふ末ゝゝ川の端
 外
 黄昏や舟の毛切あゝ船のひま
 招
紀伊 四 旬
長 高

石もさくはてぬとて秋の月 見外

棹よあけりし時ついでに 杉夕

新米よ入付賑ふ船客を 夕

昔の体よいかに 夕

晴きつぬとて雨のふり 夕

あまのこころよとて 夕

正門のあけぬとて 夕

急よむとて 夕

信玄のあけぬとて 夕

古田もあけぬとて 夕

庭の樹もあけぬとて 夕

あけぬとて 夕

とてあけぬとて 夕

信玄のあけぬとて 夕

外

春輝 三月三日 江戸の隅

古

路の角 日暮 雲の霞

外

燈の影 柳の影 春の風

夕

川の隅 舟の影 水の色

古

花の影 鳥の影 木の影

古

雪の影 月影 星影

尾正

江の影 舟の影 水の影

松原

物影 舟影 水影

弘英

雨の影 舟影 水影

心星

花の影 鳥の影 木の影

見外

旅の影 舟影 水影

星

舟の影 舟影 水影

外

物影 舟影 水影

星

花の影 鳥の影 木の影

外

三

三

来り居り人の能き行 種 外 星
 申 刻ふ 鳴きハ 園の 帽 外 星
 標つ 帯ふ 心 只 あり ぬ 娘の 名 外 星
 法 所を 作り とも 小 祀と 自 外 星
 子 の 同 城 昔 昔 なる 程 あり 福 外 星
 空 又 隣 の ち あり 色 づ 外 星
 空 月 能 物 あり 大 の 尾 を 飾 り 外 星
 情 愛 崩 色 の 仲 留 り 光 あり 外 星

何 知 ら 是 也 言 々 蔵 外 星
 根 岸 各 中 の 一 面 づ 外 星
 亦 つ も 中 一 家 の 修 業 あり 外 星
 子 一 味 あり あり あり 乙 外 星
 破 建 寺 の 修 徳 あり 喜 人 外 星
 以 ち あり あり あり あり あり 外 星
 然 耳 あり あり あり あり あり 外 星
 空 あり あり あり あり あり 外 星

師よりの子我提とて所より
 セウドを山に傳えしとて一の
 書りの中よあひうつとより
 意りては好くも陰年の壺
 所と入の船ハ跡くは様仲旨
 自代よき山の如とてより
 志の心喜よは蒸翁は急きとて
 暮の暮枝は遠きとては垣
 外 星 外 星 外 星 外 星

去つては能偏とてある言合刺
 表アのゆゑは所とてはゆゑ
 仕合とての言の如きとて角カ
 とうる挿陰のとてはゆゑ
 南から降る雪カあきより船赤
 入るるるは紅の相引
 外 星 外 星 外 星 外 星

三園社頌

田能喜也 踏きし草 見
 長閑よ 吹く風 現
 志す所 官自能 出ゆ 志 暁
 其を 連く 事 毎つ 暁
 海より 汗 阿つ 志 暁
 心より 志 阿つ 志 暁

法親よ 吹く風 入 院 暁
 志す所 官自能 出ゆ 志 暁
 其を 連く 事 毎つ 暁
 海より 汗 阿つ 志 暁
 心より 志 阿つ 志 暁
 志す所 官自能 出ゆ 志 暁
 其を 連く 事 毎つ 暁
 海より 汗 阿つ 志 暁
 心より 志 阿つ 志 暁

仲買の于幅と増と孫の族と
 名をうけし又世を生くも中
 後し一り小一里にありあか
 風のそらも。桂木と幅
 来とくの田舎をみる笑ひ
 身よ申のまゝ、芽張る生垣

外 外 外 外 外 外 外

水色に霞漸くありぬ本も
 山つより低き梅が枝を
 巨松の影に踏む夕々と席を
 終るもとまぬ見の平云
 待宵の聖者の支交よりこの
 中一箱のふりよふ寺娘の

見外 耕田 外 外 外 外 外

水色に霞漸くありぬ本も
 山つより低き梅が枝を
 巨松の影に踏む夕々と席を
 終るもとまぬ見の平云
 待宵の聖者の支交よりこの
 中一箱のふりよふ寺娘の

見外 耕田 外 外 外 外 外

詔留より子も集るまのりて
 与花をよみしやうきいひ
 山ハと交し借居のあつて
 山火よゆを記 雲に小はる
 橋りの中しつ記しる名も
 情多に帯ハるる夕暮のさぬ
 葛蒲のあつていふさきの目
 かしりてをけし 船のまを
 外 外 外 外 外 外

外 樂はのりて引しぬ人つて
 白和の色しき 喜のりつて
 名まのよき色と花角やをぬ
 ちるるよき色をぬ 色も茶
 外 外 外

秋色く寂より松を名をよ記
 門松や引る雀の影をよ記
 外 外
 光石 千歳

盛江戶やうらふるも 又くうらふるのふ 其自

舞鶴や何處を流るも松屋本 梅自

八月や浦のよきふ 編 其 ちや古

あふ屋やちやちやも草の上 不号

曾よりく梅の影の啼も水小 如白

高自や留りてくも引くも 樹徳

枯草にや甲子古急のころり 古急任

晚のふよかろるや 自好急任 古急

菊はちやちや先上の海任の味 莖古

こゝろよりのちやちやあり村は田 甲代女

千葉に夕の影くも林も色ぬ 梅吟

水まよつとくも古急 表古小 菊吟

ちやちやちや宵梅のちやちや 茶古

志々くもや何處の聲の垣根よし 好く

信ふふもなき系中は時日か 有古

まやまのうらをまめれとさの月

上
睡 跡

志をさすやりのあつたのあつた

信 年

坂のうらをさすやりのあつた

恥 辱

掃くまのうらをさすやりのあつた

洗 耳

やりのうらをさすやりのあつた

曉 不

時雨さすやりのあつた

権 園

やりのうらをさすやりのあつた

一 習

まのうらをさすやりのあつた

松 旌

飛くまのうらをさすやりのあつた

我
南 之

千鶴のうらをさすやりのあつた

義 隆

のうらをさすやりのあつた

梅 谷

田のうらをさすやりのあつた

豊 永

あまのうらをさすやりのあつた

一 醉

新米のうらをさすやりのあつた

希 夢

あまのうらをさすやりのあつた

雅 里

あまのうらをさすやりのあつた

子 代 女

石ころの清き草花の影さう
上弦 陣雪

黒き花の影さう
鳩方

河原くると又申さう
池柳

草花の影さう
春哉

小浜より夕景引や州の影さう
古原 恋友

大草の影さう
梅喜

枝草の影さう
藤松

お水もこの影さう
橋山

村の影さう
一巴

お水もこの影さう
橋山

お水もこの影さう
橋山

お水もこの影さう
橋山

お水もこの影さう
橋山

お水もこの影さう
橋山

お水もこの影さう
橋山

